
ある卒業式の風景

出口 常葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある卒業式の風景

【Nコード】

N8474D

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

卒業式の片隅で起こっていた、ちょっとした告白劇。

卒業式。今日で高校生活も最後となる日。ある者は泣き咽び、ある者は再会の誓いを語り合う。アルバムに思い出を書き連ねる者、在りし日の思い出を語る者。そして、姫たる思いを告白するものもまた、卒業のこの日なのであった。

式典を終え、教室に戻った幸人は、机の中に折りたたんだ紙切れが入っていることに気付いた。

取り出し、開いてみる。可愛いペンギンの模様の入った紙切れには、不可解な言葉が書かれていた。

「くりよぺぼらばれのすてそしん」

一見すると意味不明の言葉。もちろん、何を意味しているのか幸人にも分からない。しかし、この文字を読んだとき、幸人の心は打ち震え、その顔には笑みすら浮かんでいた。

「……やはり、来たか」

ぼそりと呟く。隣の席の男子生徒がそのメモを覗きこんで顔をしかめた。

「なんだそりゃ、何かの悪戯か？」

「ふっ、違うな」

そのメモを人差し指と中指で挟みながら、幸人は不敵に笑った。

「これは挑戦だ」

「そう。この西高ミステリー研究会会長、綾小路幸人様へのな」

「……そ、そうか」

卒業式のためた日にも拘らず、その男子生徒の顔にはやや引き気味の表情が浮かんでいた。

「これは戦い概のありそうな挑戦だ。いいだろう。この綾小路幸人の頭脳に対する最後の挑戦、受け取ろうではないか」

誰にともなく高らかに宣言し、幸人はブレザーを脱いだ。そして、

それを肩にかけ、教室から出て行く。

「おい、もうすぐ先生が来るぞ!!」

男子生徒の声に、幸人は顔だけで振り返った。

「帰ったとでも伝えておけ。この至高の挑戦者に背を向けるなど、我が流儀に反する」

そう言い放ち、幸人は悠然と廊下を歩いていったのだった。

旧校舎の一室。天宮静香は暗闇の中で待っていた。誇り臭い香りと、古びた木材の感触の中で。

彼はここに辿り着いてくれるだろうか。

いや、きっと辿り着くはず。私の見込んだあの人ならば。

高鳴る胸を押さえつけ、もうどれほど待っただろう。

卒業式はとくに終わっているはず。あの人はもうメモを見ただろう。静香の全てをぶつけたあの謎。解けるはずのない謎。ここで待っていても、彼はきつと来ない。そのはずなのに、静香は信じていた。

彼、綾小路幸人はきつとここに来てくれると。

待ち始めてから三十分。突然ガタガタと教室のドアが揺れた。静香の鼓動は最高に跳ね上がる。

きしんだ音と共に引き戸が開かれ、陽光が差し込む。

その日差しを受け、ゆっくりと教室に入ってきた人影こそ……。

「あ、綾小路先輩」

「やあ、天宮君。君だと思っていたよ」

そう言っ、ブレザーを肩にかけた幸人は静香に向かって微笑みかけた。

その笑顔だけで、静香の心は天にも昇る気持ちだった。しかし、謎を与えた者として、守るべき最低限のルールがあった。

「な……なぜ、私だと?」

「何、簡単なことだ……」

言いながら、カッターシャツの胸ポケットからメモを引っ張り出

す。

「このメモ用紙に書かれているペンギン。これは君のお気に入りキャラクターだ。それに手書きの文字の筆跡は、君のものだね？」

「そ、その通りです」

幸人が自分の筆跡を覚えていた。それは、静香にとって何にも勝る幸福。今にも抱きつきたい衝動を抑え、静香は次の質問に移った。

「その暗号の謎は……？」

ピクリと幸人の眉が動いた。しかし、一瞬の躊躇の後、幸人はきっぱりと言いつつ放った。

「わからん」

勝った。静香の心に歓喜の声が上がる。ついに、難攻不落と言われた綾小路幸人に、自分は土をつけることが出来た。そう思った次の瞬間、幸人の口から発せられる言葉に、静香はその身を硬直させた。

「これは反則だ」

「な……なにを」

「ここに来るまで三十分。過去のどの暗号パターンに照らし合わせても、この暗号は解けなかった。唯一、エニグマの暗号システムとは酷似していたが、所詮は似ているに過ぎん。つまり、これは君が編み出した暗号式に基づいているのではないか？」

見破られた。たかが三十分でそこまで調べ上げたというのか。それは通常ではありえないことだった。しかし、相手はあの綾小路幸人である。膨大な量の知識と、それに基づいた絶対的な推理。その力で彼は幾多の挑戦者を退けてきた。静香もまた、その幾多のうちの一人である。

言葉を失う静香の前で、幸人はただ朗々と語り続ける。

「作者は、読者に謎を解く機会を与えねばならない。即ち、作者のみが解き方を知りえる状況を作ってはならない。そのルールに基づいていないこのやり方は明らかな反則だ。これは完全犯罪を仕掛けるゲームではないのだよ天宮君。最も、作者が君であることを見抜

けば、あるいは一昼夜もあれば看破出来るかも知れぬが。これは恐らくだが、一時期、君が没頭していたペギミン五二三式を用いたのではないかね？」

不遜とまでいえる幸人の態度に、静香はただ心酔していた。

「完璧です。綾小路先輩の勝ちです。そう、これは解き得ぬ謎。仰るとおりペギミン五二三式が完成したのです。まだ私以外の誰も解けぬ、絶対的な謎です。私はルールを侵してなお、あなたに勝ちたかった。けれども、反則であることを看破された今、私の絶対的な敗北です」

静香はそう言つて、静かに頭を下げた。

「うむ、その潔さや良し。そして、あくまでこの私に勝とうと言う不屈の精神もまた天晴れだ。何より、この最後の戦いに、新しい暗号を編み出したその執念。これはもう見事の一言に尽きるぞ」

「しかし、私は……」

「構わん。君の作戦は九分九厘まで成功していた。最後の詰めを誤った事については遺憾と言うの他はないが、それでもなお、この戦いにおける君の意気込みは評価に値する」

そこまで言つて、それから幸人はひとつ悪戯っぽい笑いを浮かべて見せた。

「よつて、君に敢闘賞を与えよう。それと、明日からは君がミス研の新たな部長だ。これについては、後ほど声明文をもつて承認の印としよう。明日までには一筆認め、君の下へと届けることを約束する」

「あ、ありがとうございます」

静香の両眼からとめどなく溢れる涙。その柔らかなウェーブのかかった髪を優しく撫で付ける幸人。

「君が新たなミス研を作りたまえ」

幸人の言葉を聞き、静香はその胸で静香に涙を流し続けた。

そしてしばしのときが流れた。

「一つだけ、教えてください」

泣きやんだ静香は、幸人の胸にも垂れたまま、高い位置にある雪との顔を見上げて尋ねた。

「なんだ」

「暗号が解けなかったのなら、どうしてここへ？」

「そんなことか……。それは、あるいは君の方が良く分かっているんじゃないのかな？」

そう言っただけで静香を見下ろすように視線を向ける幸人。

「綾小路先輩の口から、聴きたいのです」

少し拗ねたように静香はそう言った。それを愛おしそうに眺めていた幸人は、静香の見つめる中でゆっくりと口を開いた。

「ここは、君と私の思い出の場所だろう。あの黄昏の記述士との対決は君の協力無くして勝ち得なかっただろう」

そう、次々と記述問題を繰り出す黄昏の記述士との対決は、ミズ研の長い歴史の中でも最も恐ろしい戦いの一つだったといえるだろう。その対決の最後を締め括った場所こそ、今二人の居る旧校舎の一室だった。

「ああ、やはり覚えていてくださったんですね」

「もちろんだとも。忘れるものか」

「嬉しい……。お慕い申し上げます。先輩……いえ、幸人様」
そつと、再び幸人の胸に頬を寄せる静香。幸人はその静香をゆっくりと抱きしめた。

「いいだろう。ついて来るがいい。私は君を守る盾となり、共に歩くことを誓おう」

「……はい」

そして見つめあう二人。

その唇がゆっくりと近づき……。

『三年四組、綾小路！！今すぐ進路指導室に来いっ！！最後まで手間かけさせやがって、この馬鹿野郎！！』

校内放送が響き渡る。どうやら旧校舎のスピーカーは生きている

ようだ。乱暴な物言いは女性の声だった。幸人の担任であり、教師の中でもトップクラスの荒くれ者、陣内京香に他ならない。

「やれやれ、無粋なことだ」

「ふふ、けど行かなければいけないのでしょうか？」

「ああ、我ら四組を率いてくれた恩師だからな。一つ行つてやるとしよう」

「校門の前で、お待ちしております」

「少し、かかるかもしれんぞ」

軽いため息交じりの幸人の言葉に、静香はそつと笑った。

「構いませんわ。また、新しい謎でも考えておりますから」

「うむ、あくまでも挑戦者であり続ける態度、私の見込んだとおりだ。よかろう、それでは極力ゆつくり行くとしよう。極上の謎を用意しておいてくれたまえ」

「はい、お任せを」

見つめあい、そして微笑を交し合う。静香の心臓は、いつの間にか高鳴りを止め、幸人の傍にすることが自然なのだと思うようになっていた。

「よし、それでは行こうか？レディ」

幸人がそつと手を差し出せば、静香はその手に自然と自らの手を重ねる。その手を伝うように、幸人の腕に自らの腕を絡めた。

「参りましょう」

そして二人は教室の外へと、ゆつくり歩いて出て行った。

その後、二人は共に歩み続け、幾多の事件とめぐり合うのだが、それはまた別の話である……。

（後書き）

特に言いたいことはありません。
ご意見などありましたら、頂けるととても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8474d/>

ある卒業式の風景

2010年10月8日15時29分発行